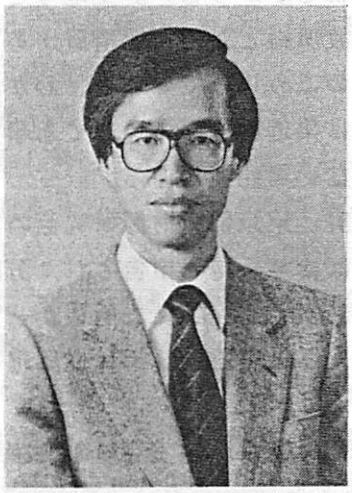
『TOYOTA 東京レポート』1985年12月号

提言

知識産業への接近



三菱総合研究所　人工知能開発室室長

玉井哲雄

経　歴

昭和23年生れ。47年東京大学大学院工学系研究科修士課程修了。同年、株式会社三菱総合研究所入社。現在、同社人工知能開発室室長。また、慶応義塾大学情報科学研究所講師を兼任。専門は、ソフトウェア工学および知識工学。

昨年（1984年）の秋に、主として人工知能技術の状況を調べるため、3ケ月ほど米国に滞在した。その頃、ベストセラーのトップを続けていたのが、ケン・フォレットの「ワシの翼に乗って（On Wings of Eagles）」である。早速、買って読んでみたが、確かに頗る面白い。

これはフォレットとしては初めてのノンフィクションで、イラン革命時に捕えられたアメリカ民間人の脱出作戦を描いている。イランでの人質事件というと、カーター政権を悩ませた14ケ月にわたる52名の大使館員等の監禁がすぐ思い浮ぶが、この事件はそれより少し前に起きたもので、しかも脱出に見事に成功したところに物語性がある。

革命前のイラン政府に捕えられたのは、コンピュータ・ソフトウェア会社EDSのイラン支社のトップ二人である。EDSはロス・ペロットというテキサス人が一代で築き上げた企業であるが、従業員一万人以上を擁し業界第2位の地位を占める。当初ペロットは、キッシンジャー等を動かして政治的な解決を図ろうとするが、それで埒があかないと見るや、ベトナムで捕虜救出作戦を指揮した経験をもつ退役軍人を引っ張ってきてリーダーとし、その下にEDSの社員6名を部下とする救出作戦チームを組織して、革命直前のイランに送りこむのである。もともとペ

ロットのタカ派的体質から、EDSにはベトナム帰りやカウボーイ的な人間が多く採用されており、それらがここで活躍することになる。

刑務所に捕えられていた二人は、革命騒ぎに紛れて脱出してチームに合流するが、その後、イランの国境を突破するまで波乱万丈の経過をたどり、最後には無事脱出作戦が成功するというストーリー展開である。実話としてはできすぎともいえるほどの話で、これがアメリカ人に受けるのはよく分かる。

さて、こんな話を長々と紹介したのは、帰国後間もなく、次のようなニュースが入って驚かされたからである。

「EDSをGMが買収した。」

アメリカの企業が、相手が上場企業であろうが、さらにフォーチュン500クラスの大企業であろうが、投資に値する収益性が認められたり、新分野への進出の手がかりとなる場合には、大胆に買収を行うことはよく知られている通りである。その意味では、GMがEDSを買収してもさほど驚くには当たらない。同じGMによる買収でも、買収規模としては、その後のヒューズ・エアクラフト社の方が、はるかに大きい。しかしこのニュースは、GMが、そして米国の自動車産業が、情報産業への展開を図っているという事実を、きわめて明確に印象づけた。

今、人工知能ブームである。推論や学習を行う人間のすぐれた知能の働きを、コンピュータ上に実現しようとする人工知能（AI）技術は、研究レベルではすでに長い間コンピュータ科学の重要な一翼を担ってきたが、実用面から産業界でも注目され始めたのは、ここ2～3年のことである。なかでも、限定された問題領域の専門家の知識を組み込んだエキスパート・システムの開発が、とくに関心を集めている。

GMは、AI分野でも社内にAIセンターを作る一方で、ベンチャー型のAI企業テクノレッジ社に資本参加するなど、かなり派手な動きを見せている。また、フォードにも同様な動きが見られる。

トヨタもこの点で、決して遅れをとってはいないであろう。米国のような買収という手段はとらないにしても、自動車の故障診断エキスパート・システムの開発などに、逸早い取組みが見られる。

クルマ自身のインテリジェント化、およびその設計、生産、検査、販売、サービスなどにおける“知識”のシステム化を手始めとして、トヨタの知識産業への接近が進むものと予想している。